経済学博士根岸　隆君の“History of Economic Theory”に対する授賞審査要旨

根岸 隆君の“History of Economic Theory”(North-Holland, 1989)は、第1章において学説史研究に対する著者の基本的考え方を略述するとともに経済学説史に関する鳥瞰図を与えた上で、第2章開拓者としてのロック、ヒューム、ケネーの検討からはじめ第10章 A・マーシャルにいたる経済理論の通史である。しかし、たんにそれにとどまらず、学説史の分野における根岸 隆君の近年の研究

(1)『古典派経済学と近代経済学』(一九八一)

(2) Economic Theories in a Non-Walrasian Tradition (1985)

(3)『経済学における古典と現代理論』(一九八五)

のほか、同君の純粋理論上の業績として国際的にも知られている非模索過程 (non-tâtonnement process) の安定性や屈折需要による固定価格経済の分析等を含む

(4) General Equilibrium Theory and International Trade (1972)

(5) Microeconomic Foundations of Keynesian Macroeconomics (1979)

を踏まえた業績であり、同君の近年の学説史研究を体系化する成果と言ってよい。

経済学史には、過去の主要な経済学説の流れを編年体的に叙述する伝統的な学説史のほか、理論生成の背景となったその時代の社会経済状況との関係を重視し経済学の変遷を現実と理論との対話として跡付けるもの、経済学の展開を経済思想の変遷として理解しようとするもの等さまざまなものが存在する。

この研究の第一の特色は、これらと異なり、過去の経済諸理論を現代の経済理論の立場から批判的に再構成し、「可能で必要な限り、数学的モデルに翻訳する」ことによって、過去の遺産を現代に伝え、現代の経済学の発展に役立てようという点にある。この場合の根岸君の基本的な考え方は、経済学の発展をT・クーン流に支配的なパラダイムの転換と見る見方を退けて、I・ラカトス流に各種の競合する研究プログラムが同時に併存しながら消長を繰り返しつつ発展する状態と見るものである。いいかえれば、経済学においては過去の学説が全面的に否定されることは稀であり、したがって、過去の学説の研究は現代の経済理論の発展にとって極めて重要であるとする考え方に立っている。それだけに理論生成の背景となった夫々の時代のイシューとの係わりは主たる考察の対象外とされている。

第二は、現代経済学理論についての優れた理解と洞察を生かした学説史であるという点である。いくつか例を挙げれば、アダム・スミスを論ずる第3章では、スミスの自然価格論はリカード、マルクスの労働価値説の観点からではなく、経済成長論の観点から見直されるべきこと、スミスの国際貿易論がリカード流の比較優位論と違い、市場規模の拡大によって生ずる収穫逓増（費用逓減）を仮定していることを極めて明確に指摘している。また、リカード、マルサスを取り上げた第4章ではケインズの先行者としてのマルサスのために二節がさかれているが、著者は、マルサスはケインズと同様有効需要の不足に多大の関心を示したが、それは投資に対する貯蓄超過を意味するケインズの

「有効需要の不足」とは違い、個々の資本家に生産動機（motives to produce）を保証する「スミス的有効需要」の不足であり、マルサスの理論はむしろ供給の経済学と考える方がよいという興味深い指摘を行っている。

第5章ではJ・S・ミルを、第6章ではマルクス経済学を取り上げて論じているが、前者ではミルの貢献として、リカード流の比較生産費の原理の妥当性に限界が見られる場合には需要供給の法則にたち戻るべきだという考え方から、国際貿易論の分野において相互需要の理論を展開し、また、ソーントンとの間での論争を通じて、今日、古典派の基本原理であるとされる需給均衡の考え方を確立したことがあげられる。また、第6章では、線型経済モデルの利用によるマルクス経済学の近代経済学的解釈の方向にそいつつ、搾取の問題、利潤率低下の問題、市場価値の問題を取り上げ、マルクスのいう競争を動学的に解釈すれば、資本の有機的構成の増大が利潤率の低下をもたらすというマルクスの命題を矛盾なく導きうること、また、マーシャルの代表的企業の考え方を援用することでマルクスの市場価格と市場価値との関係を整理して理解できること等が示されている。

第7章ワルラスと一般均衡理論からはじまり、オーストリー学派、ジェボンズ、エッジワースを経て最終章マーシャルにいたる近代経済学の分野の多くは、理論経済学者として根岸君が長年にわたり積極的研究を行ってきた諸問題と直接にかかわるが、同君は本書において、オーストリー学派が貨幣を重視し、生産を含む不完全市場をも対象とするなどワルラス流の一般均衡理論に対して競争と補完の関係にたつこと、またマーシャルの経済学がワルラスの純粋理論と違って現実への適用を重んじ、ワルラスに欠けている時間的要素や貨幣を重視するとともに非模索過程を想定しているなどの点で、新古典派の中でも独自性をもつことを示している。

本書の第三の特色は、多数の学派・学者のうちから重点的に対象を選び出し、かつ、それぞれについて理論的問題点を取り上げて精密な分析を行っていることである。そのさい「可能にして、必要な範囲」で数学的モデルを使うことによって、一七世紀から一九世紀にかけて一般的であった文章や数値例による考察を一般化するという手法から生じ易い過去の誤りが訂正され、厳密な定式化が進められているが、その場合にも、数式の機械的適用に陥ることなく十分な経済学的配慮が払われている。

以上の諸点は、同君のように理論経済学に深い理解を持つとともに、長年にわたりさまざまな学説について検討を重ねてきた研究者をまってはじめて可能となるものであり、本書は近代経済学の立場からする学説史研究のフロンティアを集大成した優れた業績と言ってよいであろう。

著書は「あとがき」で、パレート、ヴィクセル、I・フィッシャー、ピグー、ミーゼス、ハイエク等を除外したこと、ケインズ、シュンペーター、ヴィクセル等については、マーシャルやオーストリー学派との関連で触れるにとどまったことについて、これらの人々の経済学が、学説史というよりも現在の経済学の一部であることを理由に挙げている。第10章の末尾をなすマーシャルからケインズへという節において、マーシャルの経済学やワルラスの経済学が本質的に real-exchange economy を対象としているのに対して、貨幣経済（monetary economy）ではケインズ経済学が前提とした fixprice economy を問題とする必要があるという優れた指摘が行われているだけに、対象がいますこし広げられたなら学界を裨益するところは一層大きかったであろう。